

母島を愛するといふこと

小笠原母島を訪れる人々を石門に案内するガイドとして住民としての思いを母が、幼くして母島に移り住み、自然と優しい島人に囲まれてのびのびと育った娘が母島を大切にしたい思いをつづります。

フィールドエスコート h i r o o 代表

梅野 ひろみ

小笠原母島育ちの筑波大学生

梅野 なぎさ

母島に暮らす 住民として、ガイドとして

梅野 ひろみ

「母島のご出身なのですか?」。ガイドをしていて、ほぼ一〇〇%こう聞かれるが、残念ながら私は母島出身ではない。小笠原の多くのガイドがそうであるように、私も小笠原に「はまった」者の一人である。一九八八年、私は短期のアルバイトで来島して以来、すっかり母島の虜(とら)になり、一九九六年に家族三人で母島に移住した。母島に移住する決心をしたのは、娘を自然豊かで人情が厚い母島で育てたかったからだ。

母島の自然ガイドとしての出発

私は、学校の部活動で三年間にわたり故郷

の野草の植生調査をした体験から、母島に移住してからも亜熱帯の島の植物に強い興味を覚えた。そして、母島の固有植物に魅了され、島内を歩き回るうちに自然ガイドになった。ちょうど小笠原村では「東京都認定自然ガイド制度」が導入されるころで、二〇〇三年、私は第一期生としてガイド講習を受けた。石門地域のガイド認定を受けた。

その後、現在まで母島では六十七名がガイド認定



【ハハジマメグロ】国指定特別天然記念物で、母島列島の3つの島だけに生息する

されたが、そのうち職業ガイドとして母島で活動している人は十名ほどである。

絶滅危惧種が多い 母島でのガイド活動

父島・母島ともに海洋島であるが、それぞれの島独自の固有生物も多く、それらは絶滅危惧種だ。日本国内には二〇一二年現在、国内希少野生動物植物種が全部で九十九種類ある。それらは「絶滅のおそれのある野生動物植物の種の保存に関する法律」のもと保護されている動物植物であるが、小笠原諸島では、そのうち二十二種もの生物が指定されている。

母島の鳥類ではアカガシラカラスバト、オガサワラノスリ、オガサワラカワヒワ、ハハジマメグロ

が指定されており、昆虫類ではオガサワラシジミ、ハナタカトンボ、植物ではシマカコソウ、ホシツルラン、タイヨウフウトウカズラ等が指定されている。母島の東京都認定自然ガイドは、これらの生物の魅力を来島するゲストに紹介しつつも、採取や密猟等の被害から守る役割も担っている。

石門に優しい観光とは

私が案内している石門地域は桑ノ木山一帯とともに、かつて固有種のオガサワラグワヤシマホルトノキ等の樹木が多く自生し小笠原の原生の森としての価値が高かったことが

ら、一九二二年に学術保護林に設定された後、一九九四年には当時国内には二十一カ所であった森林生態系保護地域の一カ所として「小笠原母島東岸森林生態系保護地域」に設定された（二〇二二年現在、小笠原諸島の国有林の全域が森林生態系保護地域である）。

こうした貴重な生物の宝庫である石門地域を利用する上では、観光利用によるインパクトを最小限にとどめなくてはならない。そのため、東京都認定自然ガイド制度の運用が開始されると同時に、母島では「母島自然ガイド運営協議会」が設立され、母島の自然ガイドらが中心となって、石門を適正に利用する

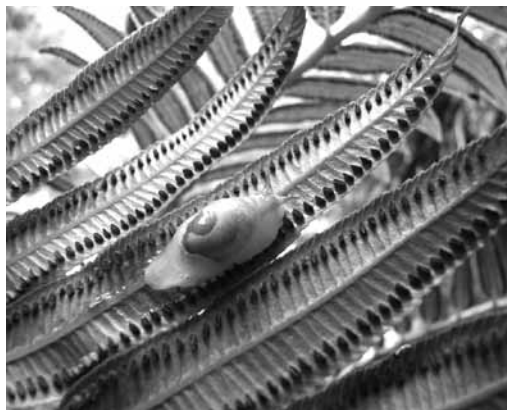
ための「母島自主ルール」が検討・施行された。

自主ルールの主な内容については、入林の際の手続き事項の他、希少動物の保護事項としてアカガシラカラスバトの繁殖期の入林の禁止（十月から二月まで）や、アカガシラカラスバトを撮影する場合の注意事項、携帯トイレの携行等が定められている。この他、ガイドは石門に入林する際に自然の異変やツアアのタイムテーブルを記入するための報告用紙を受け取り、利用ルートのモニタリングも行いながらツアーを催行している。

また、石門は一日の最大利用者を五十名までに設定しており、一名のガイドが引率



【シマホルトノキ】小笠原固有種。湿性高木林に多く「コブノキ」の愛称で親しまれる



【オガサワラオカモノアラガイ】国指定天然記念物。母島の雲霧林に生息

できるゲストも五名までとなっている。そのため、常に少人数でのガイドツアーが催行されている。自然ガイド制度が運用開始された二〇〇三年の石門地域の一年間の利用者は七十二名であったが、世界自然遺産に登録された二〇一一年には二百七十二名が石門地域を利用しており、運用開始時に比べるとガイドツアーでの利用者数は約四倍の増加である。増加後の問題点を整理し今後も適正に利用したい。

私たちが守るべきもの

世界自然遺産登録後には「小笠原が登録されて良かったですか？」というゲストからの質問が多かったが、私が確信を持って「良かった」といえることは、世界にこの自然の素晴らしさが認められた小笠原では、今まで行ってきた外来種駆除や自然再生事業が未来継続的に行われるであろう、ということだった。私も外来種樹木のアカギの駆除事業や希少昆虫の保護事業に携わっているが、母島の貴重な自然を守り地球の財産として未来に引き継ぐためには、今まで以上に母島の島民や行政や来島するゲストの、自然環境の保全等への深い理解やたゆまぬ努力が必要になってくる。

そして、もう一つ守りたいのは、島民とゲストの触れ合いだ。ガジュマルの木陰で島民とゲストが語らう母島の風景は、私が初めて母島を訪れた時と今も変わっていない。

このガジュマルの木の下で、私は母島についてどれほどたくさんのことを学んだことがガイドブックには載っていないような、とっておきの話は、島民との語らいのなかにあるといつてもいいだろう。通信の発達で母島の人々の生活は便利になる一方で忙しくなってしまう、のんびり感が失われつつあるが、木陰でホッとする気持ちを忘れずに、訪れるゲストを温かい心でもてなす島であり続けたいと思う。

(うめの ひろみ)

母島育ちの目に映る 自然の輝きと人の優しさ

梅野 なぎさ

を、日々実感させられる。

幼少時代を振り返って

私は、五歳から十八歳までの十三年間を小笠原で過ごしてきた。ショッピングセンターも、テーマパークもない島だ。上京してから

先日、有名チェーンの本屋の店頭に「小笠原諸島特集」と大きく書かれた雑誌が平積みされているのを目にして、驚いた。出身地を告げて、首をかしげられることも少なくなつた。育つた小笠原から離れた三年が経つ今、故郷が世界自然遺産になったのだということ



ガジュマルに集まる子供たち (公益財団法人日本交通公社 寺崎竜雄撮影)



服を着たまま海で泳ぐ島っ子たち

できた友達に島の様子を説明すると、一体何をして遊んでいたのかと聞かれることが多い。そのたび思い返してみれば、幼少時代の記憶は、いつも豊かな自然と温かい人々とともにある。小笠原では小学校に上がる前の子供たちも皆、浮輪をつけずに泳ぐ。私も海に潜っては魚を素手で捕まえてその場で食べた。飛び込む高さを競ったりして遊んでいた。ガジュマルの木の上に秘密基地を作り、危ないと怒られたことも懐かしい。「遊び場」が用意されていなくとも、子供が集まれば自然に遊びは生まれてくるものだ。そしてその様子は、知らず知らずのうちに島民皆に気にか

けられ、見守られていた。

都心では、小学校に入る前の子供たちが、子供だけで遊ぶ姿をほとんど見ない。当時は自分の生活環境が当たり前のものだと思っていたが、島を離れて初めて、それがどれほど恵まれたものだったのかということを知り知った。

固有種の保護活動を経験して

誰もが、初めてのアルバイト経験というのは印象深く忘れられないものだろう。私のそれは、小笠原の固有植物の育苗いくびょうだった。

幼いころからずっと側にあるものほどその貴重さに気づかないもので、当時は、とりわけ小笠原の植物に興味もなく、固有種のほとんどの名前も見分け方も知らなかった。

だが、苗を世話するなかで自然と名前を覚え始め、それぞれの特性を覚えていただき植物への知識も深まった。どのような気候を好むのか、水はどれほど与えれば良いのか、人を知る過程と同じように植物の「性格」を理解することは、次第にそのものへの愛着を強めた。

固有種の育苗の主な目的は、希少植物の保護増殖や根付きやすく成長速度の速い植物を育成し、植林するためだ。外来種の駆除

活動の効果もあり、近年ではノヤギも少なくなってきたようだが、当時はノヤギの食害により植物がほとんど生えていない山も多く見受けられた。私の活動していたNPO法人では、そうした地域に対しての自然再生事業を請け負っていた。

いつまでも母島であってほしい

固有植物が減衰した山を復元するには、多くの人手と歳月を要する。苗の植栽作業は何十人もの島民によるボランティアによって行われた。参加する人々は、子供からお年寄りまで年齢も職業もさまざまだが、共通するのは島を愛する気持ちと、「自分たちができることを」という志だろう。私たちが生きている間には、山が本来の状態を取り戻した姿は見られないかもしれない。それでも、未来の世代のために今できることを一つずつ行っていくことが必要なのだ。

三年間にわたる固有種の育苗経験によって、私の小笠原への思いは強くなった。子供のころにあった風景は、決して「当たり前」のものではなかった。私が幼いころに遊んでいた海も、山も、「誰か」によって守られ、育まれてきたものだった。そのことに身をもつて気づかされ、何も知らずに恩恵だけを受

けていたことがふがひなかった。
絶滅の危機は生物自身で回避できる問題ではない。これからも、人々の地道な努力によって保全されることが求められる。

観光地としての母島

世界自然遺産への登録と同時に、さまざまなメディアが、従来ほとんど注目されなかったのなかつた母島の姿を映し出すようになった。それと並行するように、確実に母島への観光客数も増加しているようだ。今まで母島



ははじま丸の見送り。島民の「行ってらっしゃい!」の声に「行ってきます!」と応えるゲストたち

への渡航船は、百四十三人の定員に対し乗船客数が数人程度の時もあったが、現在では切符が売り切れることもあるという。世界自然遺産効果とメディアの影響の大きさを再認識させられる。

小笠原の豊かな自然を多くの人々に体感してもらえることも、メディアに美しく映し出されることも、大変うれしいことだ。自分が育ってきた土地の良さを認められたようで、誇らしくもある。

だが今までは二ーズの異なる観光客の来島と、環境への影響も懸念している。実際に世界自然遺産登録後の母島で固有種の木の枝が何本も折られるという事件も発生しており、残念でならない。このような事態は、世界自然遺産効果のマイナスの側面だといえる。以前は母島の情報が乏しく、自ら入念に調べた上で訪れる観光客が多かったが、現在は知名度に引き寄せられて来島される方も多い。新しいルール作りや規制の強化も検討されているようだが、私は島民と観光客の交流のなかに、解決策を見いだすことに期待したい。

母島への思い

私が以前、環境保護の現実を知ったことで小笠原への愛着を深め、意識が変化したよう



母島前浜での風景

に、「知る」ことで貴重な自然の価値認識は可能になると考える。知れば知るほど慈しむ心は生まれる。島民と観光客の語らいが多い母島では、「知る」機会が多く用意されているはずだ。それだけに、島民も今まで以上に島への理解を深め、伝える必要がある。

私も今後学び続け、島外からも小笠原の魅力と自然の貴重さを発信していきたい。平和な母島が失われることなく、いつか帰る日には変わらず美しい風景が迎えてくれることを、心から願っている。

(うめの なぎさ)